

『柳橋新誌初編』 訳

佐藤 明

【はじめに】

ここに訳出した『柳橋新誌』初編は、成島柳北が安政六(西暦一八五九)年に著したもので、翌万延元年の追補がある。原文は訓点を施した漢文で記され、所々に和訓が本文の左側に添えてある。漢文戯作に属するものである。テキストとしては、一般に普及している明治七(一八七四)年に第二編とほぼ同時に山城屋より出された版を用いた。

訳文については平易を期し、注釈の類は、本文中に() または() に入れるなどして最小限にとどめた。これは紙面が限られていること、既に注釈とすることであれば前田愛・日野龍夫両氏の業績(『柳橋新誌』日本近代文学体系一『明治開化期文学集』所収 角川書店 一九七〇年・『江戸繁昌記・柳橋新誌』新日本古典文学体系一〇〇 岩波書店 一九八九年)もあり、そこで出典等がほぼ完全に示されていることもあるからである。しかし、意外にも『柳橋新誌』初編を現代語に訳す試みはなされていないようであり、ここでは『柳橋新誌』初編を分かりやすい訳を示し紹介することを心掛けた。

『柳橋新誌』は、文学・思想・文化史などの面々々と注目すべき点も多く、作者の成島柳北も興味ある人物であるが、紙面の関係で触れることができないのが残念である。詳しくは別の機会に論じたいと考える。ただ一言したいのは、『柳橋新誌』初編を書いたとき作者は將軍侍講の

職にあり、しかも書かれた時期は安政六年の幕末の騒然とした時代のまっただ中であつたということである。幕府の要職にあり当時最も教養のある人物の一人である成島柳北が、変動の時代の中で映し出したのは『柳橋新誌』という一つの優雅で落ち着いた美的世界である。すべてが渦巻き動いている中でこの空間だけが静止を保っているのである。それは何もかも包み込み集約する恐ろしさを含んだ静止であるかも知れない。『柳橋新誌』の不思議な魅力はまさにこの点にあるのではなからうか。

『柳橋新誌』は江戸の洗練された文芸を引き継いだと同時に、ある点では明治以後の新しい文学の先駆けでもあつた。江戸の文芸と明治以後の文芸について確かに断層はあるのだろうけれども、連続している部分も当然あつたと考えてよい。『柳橋新誌』はこの二つの時代の文芸を繋いでいるように思える。これが『柳橋新誌』のもう一つの魅力である。

序(明治七年刊本)

先日、何有仙史(柳北)に、この本を見せてもらった。手にとつて読んでみると、とりとめもないように感じ、理解することが出来なかつた。自分では、私が遊び歩くのがまだ充分でないためであろうと、平然として不思議に思うことはなかつた。墨田川での桜、両国での月、綾瀬での風、真乳山での雪などを見て、船遊びをするときは必ず芸者と呼んで、船宿ではいつも酒の宴を張ることが、あのときから既に七・八年にもなろうとしていた。そこで、この本に書かれている趣は概ね理解できたとあろうと思つていた。しかし、この本をもう一度読み直してみると、とりとめもないように感じるのは始めて読んだ時と同じであつて、うつとりと魅せられてしまい、自分自身をも忘れてしまうかのようであつた。ああ、仙史はその名の通り本当に仙人であることよ。何とその才能は

広くて及ばないところはなく、その文章は変幻自在で窮まりが無いことであろうか。人を五里霧中に誘い込み、その向こう岸を見ることがないのである。そもそも私のような凡人には、はたして本當の仙人の境地を伺い知ることが出来るのであろうか。深くいつまでも嘆くばかりである。そして後に続く人が、(向こう岸に行く) 渡しの筏に乗り迷うのを恐れるばかりである。そこで読者に一言贈っておくことにする。「仙人の素質を備えた者でなければ、この本を開いてはならない。」と。

己巳の年(明治二年)、己巳の月(四月)、己巳の日(二十七日)、己巳の時に記す。

伴鷗醉漁記す。

柳橋新誌序

かつて、寺岡静軒という人がいた。かれは『江戸繁昌記』を著した。詳しく八百八町の情景を描写し、名所や繁華街を余すところなく載せ、言及及ばないところはないほどであった。その文は極めて滑稽に富むものであり、そこに記されていることは極めて詳しくかつた。読む者に、寝たままでもその地のありさまを知らせてくれるかのようなものであった。大江戸の風俗を、もしすべて諳じている人があつたとしても、一つのことも付け加えることは出来ないものである。しかし、それは今から二十年も昔のことであつて、状況や風俗も移り変わり、その土地土地が賑わいあるいは寂(さび)れ、変わってしまった所は決して少なくはない。かつて、新地や深川の芸者屋は、きらびやかな芸者達で賑わつてはいたものの、今はすっかりと跡形もなくなつてしまつており、神明や芳坊(よしちよう)の男芸者屋で芸者屋と肩を並べていたものも、寂しくなり影をひそめてしまつてゐる。そのほか各地の繁華な所も、日に月に廃れてしまつて、昔に匹敵するものは少ないのである。吉原や品川は、『江戸繁昌記』

の當時に比べれば、五・六割がたが少なくなつてゐる。ああもし、寺門静軒居士に今の実状を見せたとしたならば、きっと愕然として驚き、憤慨して嘆くことであらう。寺門静軒居士が今も生きていられるかどうか分らないけれども。

しかし、この大都會の繁華は、どうしてすっかりなくなるといふ事があるのか。しかし、一方で昔はそれほどはなかつたけれども今盛んになつたものもまたあるのである。柳橋がそれである。柳橋はどういう訳でこうなつたのか。それは深川が廃れたことによるのである。一体、昔は大いに盛んであつてにわかには衰えたものが、また再び盛んにならないとは限らない。これを將軍家だとえれば、新田氏が滅んだけれど、その流れを汲む徳川氏が再興したようなものである。つまり今の柳橋は、深川の死灰が再び燃えたようなものであつて、その盛んな様子は殆どかつての深川を引き継いでいると言われている。ああ、もし今この盛んな様子を書き止めておかなければ、また五年・十年経つて、衰えて今日の面影を残していなくなつてしまつていないとも限らない。

私は物好きで愚かな一書生である。すり減つた硯と先の禿げた筆でもつてつまらないものを書いて、僅かに何とか暮らしているような身分である。静軒居士のような才能もなければ、また静軒居士のような学問もない。さらに極めて金に不自由して、いまだかつて一日も柳橋で遊んで、その實際を試した事さえない。どうしてこのような本を書く資格があるか。しかし、好んで遊び人の話を聞いて、柳橋付近の地図を調べて、その大体の様子を伺い知る事が出来た。そこでついにある晩の暇な時間を盗んで書いたのである。文が卑俗で、事柄が猥褻な事は、正人や君子に読ませたならば、つばきを吐いて捨ててしまふ事であらう。しかし正人や君子が書く事が出来るものは、私になにも書くまでもない。正人や君子が書く事が出来ないもので、我々が書く事が出来るのがこの

ような本である。私が知っている範囲についてのみ書いたのである。私
が知らないところの事については、また私のように物好きで愚かな者が
いて、書き足してくれるであろう。

安政己未（六）年、早梅が綻びようとして十二月に、何有仙史、
鎖春楼の南軒で記す。

柳橋新誌初編

柳橋は、柳という名を持っているものの、一株の柳さえ植えてはいな
い。昔の地理書には、「柳原の末にあるので（柳橋と）命名した。」とあ
る。ところで柳橋の東南に今一つ橋がある。その傍らに古い柳の木があ
る。人はそれを故（もと）柳橋と呼んでいる。ある人が言うには、「そ
この橋に柳があるので、つまりそれが、かつての柳橋であつて、今の柳
橋は後に架けられて、柳橋という名をもとの柳橋より奪つたのである。」
と。その説は地理書と異なっている。考えてみるに、もとの柳橋の正式
の名称は難波橋である。しかしこのことについて知る者は少ない。あれ
やこれやと色々と考え併せると、地理書の説の方がどうも当たっている
ようである。

柳橋の地は、神田川の喉元である。そして両国橋とは、僅かに数十間
隔たつた所にある。それ故に江戸の都の舟の便利は、この地を第一とし
ており、屋根船やちよき船が最も多い。そこから南は日本橋・八丁渠・
芝浦・品川に行く者、北は浅草・千住・向島・橋場に向かう者、東は本
所・深川・柳島・亀井戸への往来、西は下谷・本郷・牛籠・番街（ばん
ちよう）への出入りには、ここを通らないものはなく、吉原の芸者屋で
の遊び、三場（中村座・市村座・森田座）での芝居見物、また花見や船
を浮かべての月見や納涼やまた雪見の客も、みな水路をこの地にとるの

である。だから船宿の建物や船頭の数は、星のごとく雲のごとくであつ
て、他の地が及びつくようなものではなく、しかも釣り船や網船の仲間
達も、その間に混じっているのである。

柳橋の東西から両国橋の南北にかけて、多くの船のへさきやともが互
いに絡み合つて、舵や竿が互いに打ち合つていて、その数は何千艘ある
か分からない。しかも盛夏のころには、遊び客は鹿が群れるかのように
多くやつてきて、ゆらゆらと川に舟を浮かべて出ていくので、日中や夕
方には岸には横たわっている舟は一艘も見えない。非常に繁盛している
のである。さらにその上、酒樓の建物は立派で、薨が輝いていて、茶店
も洒落ていて、暖簾が風に舞い上がっている。鰻屋の香ぐわしい匂いが
鼻を襲い、肉屋の血は履き物を汚すのである。餅屋の餅は、黄河の流れ
をせき止めるほど沢山あり、果物屋の果物は、鳥が多くだという齊の
園の鳥を撃ち尽くすほど沢山ある。寿司・そば、そのほか何何……、欲
しいものは、飽きることなくあつて手に入れることができる。そして朝
に仕込んだものは、暮れにはことごとく売り切れてしまうのである。こ
こに来る飲食の客が、夥しく多いことが分かるのである。

しかし、この地の賑わいの中で、かつての勢いを凌ぐものは、以上述
べたことにはなく、別のことにある。別のこととは何か。「芸者」の
ことである。江戸の中で、芸者が多くて質が高いのは、この柳橋が第一
である。吉原も品川も、もともとどっちも芸者を多く抱えてるが、やは
り女郎が中心である。芸者は女郎の付け足しに過ぎない。劇街（しばい
まち）でも見物客のために芸者を置いているのであつて、芸者を芸者と
して重んじているわけではない。今述べたことが、これらの場所が柳橋
には及ばない理由なのである。そのほかに、新橋・芳坊（よしちよう）・
麹坊（こうじまち）・仲坊（なちちよう）・松井坊（まついちよう）な
ども、柳橋に比べれば、僅かに十分の二・三に過ぎない。思うに、柳橋

の芸者は、化粧が薄く趣がある。その意気は爽快そのものであって、客に媚びるようなことはしない。世俗に言う、「神田上水を飲んで育った江戸っ子の心意気」がある者であつて、深川の面影を残している。柳橋が他の地にはるかに優つているのは、このことによつてはなからうか。

十年ほど前は、芸者の数はそれほど多くなかつたが、このごろは日に月に多くなり、あるいは三十名とも、あるいは五十名とも、今年の春から夏にかけては、百三十四名にいたつたと聞いている。土地の人も、「今までにない賑やかさだ。」と言つている。しかも酒樓が朝に客を招き、船宿が夕べに客を迎え、賑やかな日になると、一人の暇を持て余している者もいなくなるほどである。芸者が技を売るのは、一年のうち、二月・三月・五月・六月・七月が最も盛んである。そして正月・四月・八月がこれに続くのである。しかし、名を馳せた芸者は、十月・十一月・十二月の冬の三ヶ月の寂しい時期であつても、また一日も客がないという日はない。

都で今よく耳にするのは、武士であつても商人であつても、みな自ら訴えるようにして、「金がない、困つた困つた。」と言つた言葉である。一体誰がこの地に遊んで、このような活況をもたらせるのであるうか。『孟子』の中で告子はこう言つている、「食欲と性欲とは、人間の本性である。」と。この地には、この二つのものに溢れている。なるほど、客が後から後からやつてきて、愚かなことに耽つてゐることであるよ。孔子はかつて言つた、「水よ、水よ。」と。『易』にも、「舟と櫂とのおかげで、行けないところも行けるようになった。」とある。この地は確かに水と舟とは沢山ある。なるほど、客でやつてきて遊びに耽る者が、感激して、不通の私も通になつたという。『易』の「行けないところ（不通）も行けるようになった。」を掛けてゐる。何と盛んなことではない

か。

※

貸し舟を商う家を、俗に船宿と呼んでいる。船宿でこの地に構えをなしているものは、四区に分かれる。一つは橋の東河岸と南路にあるものである。丹波（たんばや）・上総・日野・伊豆・升田（ますだ）・中村・尾本（おもと）・吉川（よしかわ）・藤本・飯村・若竹・新上総（しんかずさ）・山田・竹屋がある。これを柳橋の表街（おもてちよう）という。一つは橋の西河岸にあるものである。信濃・埼玉（さきたま）・三浦・相模・福吉（ふくよし）・新若竹がある。これを柳橋の裏河岸という。一つは橋の東南、米沢街（よねざわちよう）にあるものである。福吉（ふくよし）・三浦・播磨・相模・長島がある。これを米沢の表街（おもてちよう）という。一つはその南の、故（もと）柳橋の側にあるものである。伊勢・鈴木・海老（えび）・芳野（よしの）・桔梗・二見（ふたみ）・尾張・柏屋（かしわや）がある。これを米沢の裏街（うらがし）という。また故柳橋河岸とも言うのである。

この四区を、地元では四河岸と呼んでいる。全部で三十三軒ある。言い伝えによると、米沢街の地には、昔渡し場があつたという。今の船宿は、皆そのころ渡しを守つていた者である。家業を継ぐことは、長年にわたつてゐる。しかし、松吉（まつよしや）と大黒（だいくくや）の二軒は、最近の家業が傾いて、やめてしまつて、始めて本来の定員を欠いたということである。しかし、柳橋裏河岸の福吉（ふくよしや）は、松吉に代わつて生業を始めたものと言われている。この四つの河岸が団結しているのは、親戚のように堅いものがある。苦勞や困難を助け合つて、吉事につけ凶事につけ、相談合うのである。もし二つの河岸の間でもめ事があれば、他の二つの河岸がこれを仲裁するのである。ある河

岸に不正があれば、他の三つの河岸が、これをとがめるのである。だから船頭で悪いことをしてその河岸を追放されたものは、他の三つの河岸も（彼を雇うことを）拒むのである。しかし、柳橋の北にある藤岡（ふじおか）・八幡（はちまん）・桐屋（きりや）などは、この連盟には加わっていない。

船宿は、富んでいるか貧しいか流行っているかどうかの別はあるけれども、大体似たりよつたりである。家には必ず二階がある。二階には表と奥があるが、小さいものは表二階だけのものもある。家の者は大体一階に暮らしていて、客を二階に迎えるのである。船宿では大体船頭を雇っていて、多い者では四・五人を養っている。少ない者でも、一人かあるいは二人を養っている。皆屋根船や猪牙（ちよき）船を二・三艘持っている。

しかし、士家（ぶけ）舟を造つて、これを船宿に預ける者がある。これを邸（やしき）船と呼んでいる。その舳先に、筋金が挟んであつて、それが印にもなっている。それぞれの舟は自分の家の紋の入った幟を立ててあつて、障子を立てることも許されている。それは官船のように、便利でかつ威厳がある。それ故に船宿では実際には自分で士家舟を造つて、武家の名前を借りてくる場合もあるのである。

遊山の舟の中で最も大きい物を、俗に屋形と呼んでいる。屋形より少し形の小さい物を汁翻（しるこぼし）と呼んでいる。それぞれ舟の名前を横額に書いて何何丸といっている。屋形舟は株を持っている家でなければ、造ることが出来ないのである。小松屋の小出丸とか、明石屋の岩戸丸とかのようなのが、大江戸の内に僅かに七艘あるばかりである。そもそも遊びとは、洒落ていて便利であるのが喜ばれる。月見にせよ納涼にせよ、芸者を載せ酒を携えれば充分であつて、屋船（やねぶね）一艘あれば事足りる。どうして屋形のようにただ大きくて、甚だのろい船

を使う必要があるか。屋形は化粧が厚く腰回りの太い御殿女中が水上で遊ぶために使つたり、仏に諂い僧に媚びるじじいやばあが施餓鬼講を行うために使うだけである。

ただ輕舸（ちよき）（小型の舟、猪牙）は、夜が更けて急に思い立って、山谷堀（舟から上がる吉原の入り口）に行く客が街輿（よつでかご）の脚の代わりに使うものである。任舟（にたり）（本来は運搬用の舟、荷足）は、春の終わりの潮が退いているとき、蛤を品川の入り江で採るときに使つたり、また屋船（やねぶね）の仕事を手助けするのに使う。ともに無くしてはならないものである。

それぞれの船宿で、家計を取り仕切り、客を接待する者は、大体その妻である。世間で言う、「かかあ天下」であつて、私もまた「女將軍」（じょしょうぐん）と呼んでいる。「女將軍」はどの家でも利口ぶつた口をきいていて、一人の愚かなる者もない。そもそもそのような女を選んで妻にしたのであろうか、それとも習い覚えて熟練してこういう口をきくようになったのであろうか。亭主とはいえば、毎日外に出て、双六博打を打ち、あるいは講談や落語を聞き、あるいは喧嘩があれば、かつて出て仲裁をするのである。さもなければ囲炉裏や錢箱の間でただ居眠りをしている。

客で船宿に来る者は、その目的は一つではない。用事があつて舟を雇う者もいる。舟に乗つて芸者屋や劇場に遊ぶ者もいる。船宿の部屋を借りて碁をする者、博打を打つ者、眠る者、話をする者もいる。また芸者を招いて酒を注文する者もいる。しかし、船宿が大事にするのは、芸者を呼ぶ客だけである。

屋船（やねぶね）の値段は、水路の遠い近いに関係するけれども、それでも三朱か一分（四朱で一分、四分で一両）を超えることはない。猪牙（ちよき）が、その牙をひらめかして飛ぶように進み、荷足（にたり）

が、足を飛ばして行つたとしても僅かに四・五百錢にしかならない。日に数艘の舟を出したところで、また儲けがあるわけではない。まして碁をしたり、博打を打つたり、眠つたり、話をしたりする火消し人や大家（おおよ）などで、僅かな部屋の借り賃や茶代などを置いていく者などは、たかが知れたものである。だから芸者を呼ぶ客を大事にするのである。大事な中でもとりわけ大事な人を、「こめびつ」と呼んでいる。その家を十分に満足させるからである。私が心配するのは、自分自身が船宿の「こめびつ」になっている人が、自分の家の「こめびつ」が、あつという間にすっかりなくなつてしまわないかと言ふことである。

名前は船宿であつても、実際は芸者によつて生業をたて、客が芸者とともに泊まるのを許すものがある。これを芸者宿と言つてもまたよからう。深川が盛んであつた頃は、船宿が客を誘う有り様は、吉原の引手茶屋と呼ばれるものと同じ趣であつた、と聞いている。柳橋では深川の遺風を伝えていて、盛んな様は深川を凌ぐものがある。

客がやつてくると、女將軍は急いで出てきて彼を迎える。言葉巧みに、目敏く、すぐに客の金のあるなしと利口か馬鹿かを見て取るのである。金があるのと馬鹿なのは、むこうが望むところのものである。どうしてか。それは利口であればだましくいし、金がなければ利益が少ないからである。大馬鹿で大金持ち、これこそ「奇貨居くべき」〔買い込んでおけば将来利益をもたらす〕ものである。（客が来ると）人を酒屋へ使いにやつて、酒や肴を送り届けさせる。肴が沢山前に並んで、酒がしきりに沸いている。女將がお酌をして、話しかけたり笑いかけたりして、「近ごろ、新しく名を掲げた芸者が何人。誰誰は顔がよく、誰誰は芸が飛び抜けている。どうぞ、試しに呼んでみなさいよ。」などと言ふ。艶やかな口調はまるで花のようであり、滑らかな唇は春を語るかのようである。客は心浮かれてしまつて、頷いて呼んでみないわけには行かなく

なる。顔見知りで馴染みの芸者がある者へは、客が来るとすぐにその芸者を招くのであつて、客が頷くのを待つたりなどはしない。

芸者がやつてくると、障子をあけて、必ず「請恕」（ごめんなさい）の二字を口にする。席について座ると、必ず「今夕奉謝」（こんばんはありがとう）の四字を口にする。まず客にお辞儀をして、その次に女將にお辞儀をする。しばらくして綺麗な顔で艶かしく媚び、艶やかに三味線を弾いて心意気を示そうとする。女將はその側にいて、客と芸者との間の舵を巧みに取るのである。その揚げたり下げたりの舵さばき、その巧みな様は口では表現できないほどである。船宿の名に恥じず、舵を取るのが巧みであることよ。客は浮かれて気持ちが高揚し、知らずのうち手が舞い、足が踊り出すほどである。ついに懐を探つて、金を芸者や女將に何がしか投げ出すのである。その後三味線はますます艶やかさを添えるし、舵取りはますます巧みになる。豪勢な客になると、芸者の付き人や、家の女中のばあさんにいたるまで、みな心付けを受けることができるのである。

客と芸者が知り合つて、ただ三味線や唄や宴席だけで終わらない者は、おかみがその仲立ちをするのである。このような者は、五節句や盆暮れに、芸者のために贈り物があれば、船宿も必ず賜り物を受けるのである。力のある客になれば、六月の祇園会や正月の夷講などに、芸者に新しい着物を贈り、船宿の畳替えをさせたりする。これが所謂「こめびつだんな」という者であつて、一つの船宿に僅かに一人いるだけである。そのほかにも、客に勧めて舟遊びをしたり芸者を伴つたり、花火とか初卯とか、通常の船値とは別に、網で掬うように利益を得ることも、また多いのである。

大体芸者が酒樓や船宿に招かれると、揚代を客から得るのである。一分について二百錢を謝礼として出すのである。二歩であれば四百、三分

であれば六百になる。船宿で肴を酒屋から取るときは、また二朱について三百銭を上前としてはねるのである。(船宿では) 利益を客から得て、また芸者からも得て、またさらに酒や肴からも得るのである。その利益はどれほどであろうか。これを得るものになるのは、つまりは一女将の三寸の滑らかにまわる舌に他ならない。

私は次のような話を僧侶から聞いたことがある。「叫喚地獄には熱い金鉢があつて、嘘つきの舌を抜き取ってしまう。」と。はたしてよくこの女将の滑らかにまわる舌を抜き取ることが出来るのかどうか分らない。また「むかし、巴御前が長刀を揮つて敵の將軍を万人の中で切つた。」という話も聞いたことがある。はたして巴御前の刃が女将の舌の矛にかなうかどうか分らない。『中庸』に、「白刃を踏むことは出来る。(しかし、中庸を行うことは難しい。）」とある。巴御前の刃がいかに切れるにしても、私はそれを敢て踏んでみよう。しかし、女将の舌の矛は、一たび踏むと、足は滑り腕には力がなくなつて、骨も脱けるし氣も呆(ぬ)けるし、グニャグニャとなまこと同じようになってしまふ。

酒屋へは三里離れているし、豆腐屋へは二里もある、これは山の手の田舎の人家のことである。いま、大江戸のうちには、どんなつまらない街であつても、十歩に一軒の店があり、百歩に一軒の料理屋がある。中国の松江の鱸であろうと、杭州の酒であろうと、いながらにして飲食することが出来るのである。ましてこの柳橋ほど賑やかであれば言うまでもない。酒楼が多いのは、江戸ではこの地が第一である。川長(かわちよ)・万八(まんぱち)は、橋の北にある。梅川(うめかわ)・亀清(かめせい)・河内(かわちや)・柳屋(やなぎや)は、橋の南にある。平三(ひらさんや)・深川(ふかがわてい)・草加(そうかや)は、みな暖簾を米沢街の方に出している。しかし柏屋(かしわや)・中村・青柳(あおやぎ)の三楼は、みな僅かではあるが、川から離れたところにある。

そのほかに、丸竹(まるたけ)・若松(わかまつ)・和泉佐(いずさ)・小松亭(こまつてい)などの小店や出店に至つては、指を折つて数え切れないほどである。

とりわけ、酒・肴が最も佳いのは、川長である。そして柏屋がこれに続く。万八・河内・中村などの家は、俗に貸席(かしざしき)といわれるたぐいのものであつて、書家や絵描きの書画会や、金持ちの無尽会や、あるいは踊りや三味線や生け花の師匠で、仕事を始めたり稽古したりするものが、そこを借りてむしろをひいて、人々を呼び集めたりする。江戸勤めになつた藩士で始めて江戸に来た者は、梅川か青柳で飲むといふと聞いている。その名前が以前から知られているからであろうか。しかし、梅川・青柳の二軒は、最近では段々落ちてきて、酒やさかなの味・香りは、ほとんど亀清なんにも及ばない。寿司屋は安宅(あたけ)・与兵(よへい)・中川(なかがわ)がある。鰻屋は玉甚(たまじん)・山口(やまぐち)・船路(ふなじ)がある。客が一たび手をうてば、珍しくあるいは美味しい料理が、重なるようにして陳ぶのである。

どこも酒楼では、朝早く起きて、若い者を日本橋にやつて魚を買わせるのである。(若い者が) 帰つてきてから客を迎えるのである。客が知らないで早くやつてくると、「河岸からまだ帰つてきていません。」と断りを言うのである。だから客が来るのは、巳(朝の十時ごろ)からである。侍もいるし商人もいる。金持ちの百姓もいれば腕のよい職人もいる。医者が数人、坊主頭が西瓜のようにうす高く積んでいようであったり、御殿女中の一団が、石臼のような太い身体で階段を上つて行つたりする。長い刀を側に置いて、肩を怒らせ百舌のような言葉でしゃべつて飲む者は、九州の新しく来た藩士達である。座敷を閉めてひっそりと、びくびくして食う者は、寛永寺の戒律のある僧侶である。どの楼でも客をもてなすやり方は同じである。まず茶と菓子とを出して、そして吸物や刺身、

焼魚を次々と並べていく。茶碗盛りが最後に出る。御飯は客が食べるかどうか任せる。旨いか不味いかの別はあるけれども、一人前の値段は、最も安く一朱、高くて一分(四朱)である。

夏の間は、客がやっていると、酒を飲む前に風呂に入らないと気持ちよくない。そのために湯殿を設けるのである。どこも清潔であつて、銭湯がやかましくて汚れているとは違つている。(酒楼では)客のために浴衣を作つている。それぞれ自分の家の紋かあるいは名前を染めている。浴衣を着て酒を飲むと、爽やかな風が膚に心地よく、着物の汗も乾かすであらう。思うに風呂がもつともよいのは柏屋である。しかも、一年中どの季節でも湯を沸かしている。風雪の時でも、寒さをとくすことが出来るし、飲み過ぎた夜でも、酔いをさますことが出来る。他の酒楼でただ暑さを凌ぐために風呂を沸かすのとは違つている。

風呂に入り、そして酒を飲む。すると芸者がいないわけにはいかなくなる。芸者を酒楼に招くことになるのは、船宿と同じである。しかし客をそのまま留めて芸者を同宿させるということについては、それはしないのである。私は次のようなことを友人から聞いた、「梅川と亀清の二樓では、大体船宿と同じ風である。主人は知らない振りをして、下女にその仲立ちをさせるのである。」と。あるいはそうであるかも知れない。でも船宿が簡便で人に知られない風であるのには及ばない。

酒楼の決まりでは、客が芸者を連れてきた場合は、芸者のために(楼に)その心付けを置く。酒楼の方で芸者を呼んだ場合は、心付けは置かない。しかし、芸者は酒楼では、たくさん食べるようなことはせず、気を配つて慎み深くして、そのかみさんや女中達に接するとき、客に對するより骨が折れる。もしそうしなければ、「あの子は態度が大きい、あの婆(ばばあ)はわがままである。」などと言われる。大食らいな女だと目配せされ、御客気取りであると嘲られる。口や鼻の格好まであれ

これ批評され、牛のようだとか馬のようだとか言われ、またその店に招かれるようなことはなくなつてしまふ。だから芸者は、しばしば客に頼んで、女中に一片金(二朱)を与えるのである。もし金を与えれば、その客を敬つて、その芸者とも仲よくなるのである。昨日は誇つて牛や馬のように言つた者も、今日は姉妹のようになり、かみさんの目の前でその利口さをたたえ、他の客の席でもまたその芸者が美しいとかいつて吹聴するのである。

ああ、人情というものが、裏返るのは、ただ金に他ならない。金は愚か者を利口者に変えるし、醜い者を美人に変える。だから聖人孔子の『易』にも、「乾を金とする。」といふのである。また、「乾道は変化する。」とも同じ『易』にある。面白いことであるよ。これは『易』の象『易』の中にある卦の解釈から取つたものである。金が役に立つのは、大変なものであるよ。武士には俸禄というものがあるし、商人にはそれぞれの仕事がある。食べるための米とか、飲むための酒に、事欠くということはないであらう。そうであるのにわざわざ街の楼へ行つて、酒や食いに金を費やし、また芸者に費やし、また女中にも費やす。その費用はどれほどになるか考えてみれば分かるはずだ。好きな物を食べるのはまだ分かる。また愛する人に溺れるのはまだ無理もない。しかし溺れ耽る気持ちから、ついに愛する者のために、愛してもいない者にも金を費やすことになる。笑うべきことである。

しかし、このような笑うべきことは、私のような極めて貧しい書生の身で成し得ることではない。孟子の言葉に、「一丈四方に並ぶ御馳走、数百人の召使いの女は、たとえ私がそのようなことができる身分になつても、そんなものは欲しない。」とある。孟子の主張した道は受け入れられず、彼が言つたことも、聞かれなかつた。たとえこの楽しみを得ようとしても、出来ないのである。だからこのような発言をただけであ

る。もし孟子にそれだけの贅沢ができる地位が与えられたら、喜びのあまり寝られなくなってしまうかもしれないということが、どうして分かるか。もし私も、このような笑うべきことをすることができれば、気が違ったかのように小踊りして、死ぬまで後悔するようなことはないであろう。どうして他人が笑うだろうということを気にする暇があるか。そうであるのに、いま筆を振るい、紙を無駄にして、人が笑うべきことについて記すのは、財布には一文もなく、自分を嘆き人を羨む気持ちから出てきたのにほかならない。これこそまた笑うべきことである。

※

同じ娼妓ではあっても、どれも同じと言うわけではない。色を売って芸を売らない者は、俗に女郎と呼んでいる。芸を売って色を売らない者は、芸者と呼んでいる。かつて深川の妓は、二枚証文を使っている。色と芸との二つを売るのを許した。これを女郎芸者と言ってもよからう。柳橋の妓は、専ら芸を売る者であつて、女郎ではないのである。しかし、しばしば色を売る者がいる。何故であろう。深川の遺風があるからなのだろうか。しかし、深川では公然と色を売るのであり、ここ柳橋では密かに売るのである。公に売る者は普通一般の形態であるのでやりやすく、密かに売る者は普通ではない変化した形態であるのでやりにくいものである。これが深川と柳橋とで異なる点である。

大体、人が女郎を買うのは、ともに寝るためである。芸者を招くのは、その技を聞くためであつて、ともに寝るためではない。しかし、寝るためではない人と寝て、その売らない色を売るようにさせる。これを「転ばす」というのである。思うに、芸者にその生業を変えさせることが、伏して動かない石を転がすことに似ているからであろう。あるいは、こういう説もある。「転」は押し倒すという意味であつて、毅然として節

操を守っている者が、守っているものを失つて倒れるということである。どちらの説が当たっているかは分からない。考証好きな儒家の定説をまきたいものである。

芸者を「転ばす」のは、易しいようであつて難しく、難しいようであつて易しいものである。どうしてであるか。相手が売ろうとしないものを、こちらが売らせようとし、御法度を犯して私姦を行うからである。その難しい理由の第一である。こちらが相手の容姿や芸を喜ぶなら、相手だつてまた男の才を選ぶものである。女郎が客の美醜を構わずに、床に侍るのとは違ふのである。その難しい理由の第二である。相手が納得しないことについては、こちらが無理にやってもうまく行くことはない。無理にやれば逃げて行くのは、一般の家で主人が下女に対する場合も同じである。まして水に浮かぶ浮き草のような芸者稼業ならば、決まった人に身を任せるようなことはしないのであるからおさらである。その難しい理由の第三である。旨いことを言ったものだ、乙田という俳諧者に次のような句がある。「うき草や 今朝はあちらの 岸に咲く。」と。この句が私が言いたいことを語ってくれている。このことが易しそうであつて、実は難しいということなのである。

しかし、相手も人である。情がないと言ふことがあろうか。こちらが情を持つて接し、情を持つて語る。そうすれば相手が動かないということはない。これが易しい理由の第一である。彼らは皆、艶やかな三味線や淫らな唄を聞いて育ち、客との風月とか花火とかの遊びに慣れ親しんできている。一般の家の娘が、深く自らの節操を守っているものとは同じではない。これが易しい理由の第二である。いまこの世間にあつては、男であつても女であつても、好むところ、望むところのものは、ただ金である。一事一物どんなものであつても、これを縦にするのも金であり、これを横にするのも金であつて、金を惜しむことをしなければ、后(き

さき」と貞女とを除いたほかは、どんな女性でも手に落ちないものがあるか。まして貧しさのために身を売ってしまった彼女達においてはなおさらである。これが易しい理由の第三である。川柳に、「井守より もつと効くのは 佐渡の土。」とある。井守とは俗に言う惚れ薬であつて、佐渡の土とは金のことを言う。この句もまた私の言いたいことを語ってくれている。このことが難しうであつて、実は易しいということなのである。

これらの三つの難しいことと三つの易しいこととの道理を知る者と、始めて一緒に芸者を「転ばす」方法を語ることが出来るのである。しかし、ただその道理を知つていて、その方法を諳じていても、その道具がなければ、旨く成し遂げることは出来ない。芸者を「転ばす」道具は、三つある。「才」と「貌」（容貌・姿）と「金」とである。その中で金が最も大事である。ただ才や貌があつても金がなければ、計略を用いて行うことが出来ない。これを例えれば、武器を持たないで戦うようなものである。必ず負けることになる。しかし金があつても貌がなければ、相手は金を愛して「転ぶ」のであつて、自分を愛するがためではない。金がある間は親しむけれども、金がなくなれば離れて行くのである。これを例えれば、魚を釣っている人も、餌がなくなつてしまつと、魚が散つて行くようなものである。金があつて才がなければ、芸者は嘘を色々とついで、ただ搾り取ることばかり考へる。自分はただぼうつとなつて状況も理解できず、ただ芸者の気に入られようと望むのである。たちまちのうちに金がなくなり家が傾くばかりである。これを例えれば、阿片の煙草を吸うものが、その味を旨いと思つてその毒のことも分らず、ついに倒れてしまふようなものである。

だから、「三つの道具が備わつていなければ、その道理を知つていて、その方法を諳じていても、また旨く成し遂げることは出来ない。」とい

うのである。もしこの三つの道具を兼ね備へていて、よく三つの難しいことと三つの易しいことを悟つたものは、柳橋の百名余りの芸者に、枕を並べて情死させることが出来るのである。どうしてただ一度や二度「転ばす」だけで終わるのか。「風流世界の飛將軍（つわもの）、花柳界の生き仏。」といわれるであろう。これは世間にそう多くはいない人なのである。その次について評してみよう。金と才とがある者は、貌がなくても、また大いに快く遊ぶことが出来るのである。金と貌とがある者は、才がなくても、また相手の愛を得ることが出来て、大事な客としてもてなされる。金と才がなくて貌だけある者、金と貌とがなくて才だけある者は、ともに最低であつて、どうしようもないのである。

試みに才と貌との二つを秤に掛けてみよう。才だけでもなんとかすることはできるが、貌だけではどうすることもできない。どうしてか。「貌は死んだものであるが、才は生きたものだからである。」死んでいるものは変化することはないが、生きているものは状況に応じて変化することが出来る。武器を持たないで戦えば、負けるのは必然である。しかし、陳渉の仲間、鋤や鋏を持つて、田舎に起こり、瞬く間に巨大な秦帝国の三十六郡を陥れた。清の太祖（ヌルハチ）は、僅かに形見の十三幅の甲（かぶと）でもつて、満州の地に起こり、ついに中国の四百余州を奪い取つたのである。変化に応じて行動し、時節を見て事を発し、ついにはその志しを成し遂げた者ではないか。さすがに、孟子はうまいことを言つてゐる。「杖を手にして、秦や楚の強力な兵力を伐つ事が出来る。」と。もしこのようであれば、武器がなくても、目的を成し遂げる事もできるのである。

遊客の財布の底にある二・三朱の金も、清の太祖の形見の甲や、陳渉の茨でこしらえた矛と同じようなものである。もし変化に応じて時を考へ、功をはかろうとすれば、どうして僅かなはした金でも、その芸者に

対して嘘八百を説かなくても、誠意を持つてもてなさせて、あつという間に転ばせてしまうのである。深草の少将が九十九日小野小町の所に通つて思いを遂げることが出来なかつたが、そのようなことに挑戦する必要もないのである。さらにその後で、ますます自分の知恵才覚を磨いて、自分の舌先を鋭くして、その芸者が他で稼いで来たところのものを、自分に貢ぐようにさせれば、自分の元手もまた大いに貯えられるというものである。これは成功といえる。このようであれば、陳渉が三十六州を打ち負かしたり、清の太祖が四百州を奪い取つたのと、ことの違ひは大いにあるけれども、その趣という点では同じである。これを「飛将」(つわもの)といつてもよいだろう。これを「生き仏」と名付けてもよいだろう。これは他でもない、ただ才によつたまでである。だから、「金も貌もなくても、才だけがあるものも、なお何とかすることが出来る。」と言へるのである。

ただ以上の論評は、名のある「校書」(げいしや)のために言つたものである。こせこせとして誰とでも枕をとる芸者に及んでは、ひとたび手を施せば、鞠のように転がるし、飴のようにくつつくのである。どうして道理や方法を講じ説く必要があるか。ああ、客で芸者を招く者は、甚だ多い。三味線を聞く者もいるし、豪遊ぶりを見せようとするためにする者もいる。酒を飲むのを楽しむためにする者もいる。人をもてなすためにする者もいる。必ずしも芸者を「転ばす」ことを楽しむ者だけとは限らない。それなのに今ここで(転ばすことを)繰り返して来たのは、「淫」を教え「蕩」へと導こうとするがためではない。柳橋が今日の隆盛を致したのは、つまり「転」の一字によつていたのである。だからその繁盛の様を記そうと思えば、「転」についての論説を詳しく記さないわけにはいかないのである。読者よ、お笑いにならないで頂きたい。

※

人に長幼の序があるように、芸者(妓)にも大・小の区別がある。大妓の方は、「芸者」であり、小妓の方は、御酌(おしやく)という。小妓は三味線を弾かず、ただ酒宴に待るだけなのでこう呼ばれる。大妓を呼ぶときの値は、昼夜は二分で、朝から真夜中に及ぶような場合は、さらにあるいは一分を加えるのである。僅かの時間だけ呼んだ場合でも、一分である。小妓の場合はその半分である。だから「半妓」という言い方もある。客は定価の他に金を出す場合もある。これを「花」という。「花」というのは、派手やかということであり、宴会の席を派手にするのでこういうのである。「花」も大体は大妓が一分(四朱)であり、小妓は二朱である。

衣服の決まりについても、(大妓と小妓とは)また区別がある。大妓は着物を地に曳く。左手で袂を取つて行く。これを「左袂」という。その帯は全体が絹で、俗に「まるおび」というものである。また襦袢は、襟を白くしている。一方小妓の方は、着物の裾を腰に端折つて曳くことはしない。また帯の表裏で、絹に違いがある。これを「はらあわせ」という。襦袢は、襟を紅にしている。

大妓が職としているのは、三味線と唄とである。その技は、長唄・富本・常磐津などがあるが、とりわけ清元を得意とする場合が多い。しかし、座敷で弾くのは、端唄とか新詞(はやりもの)に限られる。小妓はうまく三味線を弾く者がいても、弾くことは許されない。大妓の業を侵し奪うということからである。そこで皆踊りを習うのである。すべて小妓については、歳の大小に関わらず、必ず大妓に姉として仕える。しかし、大妓も船宿の女将に対しては、また必ず「姉」と言っている。思うに酒の席では、大妓が三味線を弾いて、小妓が踊るが、これは客の観賞

を満たそうとするためである。ところで小妓の舞い、大妓の三味線には、上手いのもあれば、下手なものもある。一概視することはできない。しかし、十人のうち、上手いのは三人、下手なのは七人である。美人には下手なものが多く、そうでない者には上手いが多い。美人でない者は芸で売れることを考えるからである。だから専ら芸に励むのである。美人は顔で売れることを考える。だから芸の方はお留守になる。客の方も、顔で選ぶ者が七、芸で選ぶ者が三である。だから下手な者は利益が多く、上手い者は利益が少ない。

しかし、芸も顔もともに「下」であるのに、よく売れる者がいる。「奇なる」ことと言つてよい。私はかつて友人にこの「奇なる」ことについて質問してみた。私は、「芸者を呼ぶのは、(目的は)芸か顔かである。しかし、この二つともないとすると、何の取り柄があるろうか。家で下女を弄んで、金をかけずに済ませた方がましではないか。」と言つてみた。するとその友人が笑つて言うには、「あなたは、一を知っているが、まだ二を知らない。繁華な大江戸の中で、遊びの客が一体どのくらいいるであろうか。しかし、人の心はそれぞれに異なっている。顔を歎ぶ者がいるし、芸を觀賞する者がいるし、その(芸者の)気概を愛する者がいるし、その(芸者の)秀囲気を好む者がいる。顔と色とはもとより重要なものである。しかし、芸者が、義侠心があつて自分の財を惜しまず投げだし、義理や人情を重んじて客を辱めないのは、奥様やお嬢さんが夢にも思わないところである。姿・形がごきれいで化粧も薄く、立居振舞も状況に応じていて、言葉遣いや応対も、その時の状況にかなっているのは、下女達の考え及ぶべきものではない。これは芸者だけの持ち前であつて、他の人が簡単に身につけられるようなものではない。容姿と芸がどちらとも良くなって売れるのは、こういうわけではないか。」とのことである。

私は、その解説を聞いて、長い間の疑問が釈然として解けたのである。そこでまた一つの疑問が生まれたので訊ねてみた、「芸者であつて芸がない者でも、なるほど取り柄がある。世の儒者にしろ医者にして『者』の字が付く人達がいる。儒者であつても四書・六経が何の道かも知らない者がいるし、医者であつても素問・靈樞がいかなる医術であるか知らないような者がしばしばいる。この二つの『者』の付く者は、芸者であつて芸がない者と同じことである。(このような儒者や医者)取り柄があるだろうか。」と。(その友人は)ちよつと考えて見て、すぐに膝を叩いて言つた、「ない、ない。」と。さらに他の人に聞いてみるまでもなからう。「修身」とか「齐家」の講釈も、もし役に立たないならば、端唄とか新詞(はやりうた)が、人の耳を喜ばせるのにも及ばないであろう。陽を補い陰を調えるという漢方医の匙も、もし盛り様の加減を知らなければ、興を起し酔いを勧める三味線の象牙のばちにも及ばないだろう。笑うべきことである。ああ、世を救い教えを垂れる儒者や、命を司どり若死にを救う医者にして、かえつて艶やかで弱い女にも恥じることがある。哀れみに堪えないのである。

聞くところによれば、以前は芸者は、往々色々な技能に巧みであると言ふことであつた。笛を吹いて鼓を打つ者がいた。俳句や碁が巧い者がいた。脚は舞いを踊りながら、喉で笛のように(美しい)音を出す者がいた。本式の拳では、一人として下手な者はいなかつた。しかし、今はそうではない。僅かに三味線を弾くことができるだけである。本式の拳もみな極めて下手である。中には全くやり方さえ知らない者がいる。また近ごろ流行の拳のうちでも、藤八(とうはち)・来来(こいこい)・三拍(みつうち)なども、客の相手ができるほど巧い者はないという。ああ、儒者が文章や詩賦を作るのも、医者が鍼や本草学に詳しいのも、昔に及ぶ者はないと言ふ。芸者について述べたのに、それが儒者や医者に

も及ぶとなると、まことに人を悲しませることであるよ。悲しんだり笑ったり、また涙を流してこの文を書くのは、人を罵るためではなくて、自らを罵っているのである。

※

柳橋の南を右に曲がれば、同胞街（どうほうまち）になる。そこが芸者達の巢穴（すみか）である。その北は裏岸（うらがし）で、その南は広巷（ひろこうじ）で、櫛のように軒を連ねて住んでいる。街には、裏と表とがあり、はやってる者は表に住んでいるし、はやっていない者は裏に住んでいる。その家は、貧富の差は様々であるが、しかし大いにはその趣が異なっているわけではない。外は格子戸を閉めており、中には角火鉢を置いている。火鉢は綺麗にしてあって塵はなく、鉄瓶を載せておく所と、鉄瓶とだけはつやつやしているが、暖かい灰は白くなっている。

芸者は火鉢のそばにいる。アアと欠伸をして昼寝をしている。大概の芸者はわがままで怠け者で、全く女の仕事はしない。三味線や唄のおさらいをして、白粉を塗って化粧するほかは、何一つしない。しかし、神仏を拝み祭ることについては、みな励んでいる。神棚を作っては、神霊を祭っている。金比羅もあれば、帝釈天もあれば、不動尊もあるといった具合である。祈る目的によつてその神が異なるのである。神棚の上には、必ず一本の男根を飾っている。そして小さな紐を横の柱にかけて、紙をひねってこれを縛っている。そんなものが、ごちゃごちゃと垂れ下がっている。たぶん客からもらった祝儀を、帯に挟んで帰って、その金を裸にして（自分の財布に入れ）、その紙をひねってこれに結んだのであろう。このようにすれば、この紙がその伴侶である金を招くのだ、と言うことである。しかし、実際の意図は、人によく売れているというこ

とを誇りたいがためであろう。

芸者が仏を信仰するのは、神を信仰するより、さらに倍するものがある。必ずその宗派の開祖を特に尊ぶ。ところで芸者の家は、十のうち九までが日蓮宗である。信仰が凝り固まったさまは、普通の人に比べれば一段と程度が甚だしい。思うに、自分達がいつも行ってきたことは、嘘をついたり欲を張ったりして、その罪業は甚だ重いものがある。そこで日蓮上人の力を借りて、死後に地獄に落ちないことを願うのである。私が思うには、彼女らの現在の身の上が地獄であつて「私娼を地獄ともいう」、別に地獄があるのであろうか。彼女らは日蓮宗ではあるけれども、その魔法や幻術を自在に駆使するところは、キリシタンの及び得るところではない。

大体芸者の家は、父があるものは十分の一であり、夫がいるものは百分の一であつて、大概は芸者とその母との二人で暮らしている。猫あるいはチンを一匹飼っている。全部で三人口で、芸者は狐のように媚びを売るし、母は猪（むじな）が着物を着たようなものである。猫やチンは必ず、「母子はみな私と同じ仲間なのに、どうして私だけ獣扱いにされるのか。」と言うであろう。その獣の家に行つて獣となれあう者も、やはり獣と言つてよいであろう。とすると獣である者はどんなにか多いことであろうか。

客が来ると、このおふくろはにわかに酒と肴とを注文して、談笑して御世辞を言う。あるいは客の服装や様子を褒めたり、あるいはあの子が首を長くしてお待ち申しておりますなどと説く。その間に家が金に不自由しているなどという話を差し挟む。ペチャクチャ・ペチャクチャ。興が乗り、酒がなくなつたところで、客を促して、二階に上らせて眠らせる。二階は女が化粧をするところでもあるので、化粧道具がずらりと陳んでいる。二階がない家などは、甚だ都合が悪い。客が眠ろうとする時

になつて、おふくろが用事があると言つて、外に出てその場を外すと言ふことである。馴染み客が家にいるときは、ほかの楼からの招きがあつても、病氣であるとか出ていますとか言つて断るのである。

私の友人である愛童子(桂川甫周)は、かつて私に、「芸者の家へ行つて遊ぶのは、船宿や酒屋が金がかかつて人目が多いのよりは勝つてゐる。しかし、またよろしくないところもある。芸者の欲張りには我慢ができませんけれども、おふくろの欲張りには我慢ができません。ましておふくろのくせに焼き餅を焼く者がいる。これが最も恐いことである。」と言つたことがある。しかし、一概には言うことはできない。芸者が客を家に呼ぶ場合、客の金が目的で、船宿をのけて、独り占めして欲を逞しくしようと思つて、長く関係を結ぼうと望む者もいる。しかし、芸者の家での遊びは、(一般的に言えば)他の酒楼に比べれば、費用が少なく、事が漏れず情が細やかであつて、関係も長く続くものである。なかなか善い策といふことができる。だから芸者の方も男の身の上とか心意気とかを良く知つてゐるのでなければ、家に呼ぶことはしない。

しかし、おふくろの方にもまた欲張りと思つてゐないと、狡猾なものとそうでないものがある。すべてを一概に見ることはできない。欲張りで狡猾なのは、多くは仮の母の場合である。そうでないものは必ず本當の母である。しかし、仮は多くて本當は少ない。どうしてか。自分の娘に人のお酌をさせ、客の機嫌を取らせ、甚だしい場合は女郎と同じことをさせる。誠に忍びないことであつて、貧しくて、他にどうしようもない場合でなければ、こういうことはしないのである。若い時に娼妓になつた者は、歳を取つてから、家を守つて夫に仕えることはできない。そこでまた貧しい者の幼い子を買つてきて、その子に自分の昔の仕事をさせるのである。そのほかに、娘を買ひ取つて芸者にして、生計を立てる者

が甚だ多い。それだから仮の母の方が本當の母より多いのである。仮の母が客を見るのは、鷹や鷲が獲物を見るかのようにである。女を囿と考へて、とにかく獲物を得ようとするのである。本當の母が客を見るのは、婿を見るかのようにである。情に引かれて利益を忘れることにもなる。だから仮の母に抱えられた芸者はやたらに「転ぶ」が、本當の母の場合はそうではない。二者の得失は、大いに隔たりがある。

この地は花街(くるわ)とは違つたので、もとより娘を買つて(芸者にして)売ることを禁じてゐる。だから仮の母は、「この娘は、母を養うために、家を出て酒家に雇はれてゐるのです。」と表では言つてゐる。みな酌人(しゃくじん)と称してゐる。一軒で、数人の芸者を養う場合は、みな姉妹と称してゐる。あるいは同じ姉妹でも家の名を異にしてゐると言ふ。「娘を芸者に出すのは一軒に一人といふ決まりがあつた」大妓の年齢は十七・八から三十、小妓は十二・三から二十である。しかし、自分の歳を言う場合、必ず二・三歳若く言ふ。甚だしい者に至つては、七・八歳も若く言ふ。帯の下に繋つてゐる香ぐわしい草を、ひとたび撫でてみれば春の気配がようやくたけなわになつたのが分かるし、額による皺を、伸ばそうとしても秋風が知らずのうちにつけてゐるので、すぐに分かるということも、知らないものであろうか。笑ふべきことである。

仮の母が娘を買つて芸者とする場合、幼い時から養ひ育てれば、値段は安いけれども、一人前にするのには時間がかかる。それで、その娘に唄や踊りを教え、衣服を作るが、一人前になれば利益をほしむまにすることができる。また技芸がほほ出来上がつてゐて、年頃もちよよい者は、二・三十両で一・二年の期限を付けるのでなければ、手に入れることができない。あるいは半額で買ひ取り、抱え主(仮の母)と芸者との間で利益を折半するのを、敲分(たたきわけ)と言ふ。このような場合は仮の母も娘を客のように取り扱ひし、芸者の方も母を立てるような

ことはしない。

客が芸者を身請けして、妻やあるいは妾にする場合、その値段は、芸者の容姿や技芸や売れているかどうかによって、上下する。多い場合は百兩、少ない場合は二・三十兩である。権勢家・富豪に至っては、上にはきりが無い。しかし、仮の母は貪欲さは飽くことがないが、本当の母はそうではない。情の違いである。曼翁（余懷）の『板橋雜記』には、「本当の母は金を取るのは多くはない。仮の母は高値を強要する。」とある。人情は日本でも中国でも変わらないことが分かる。生みの母の場合、あるいは衣服や道具などを併せて娘のもとに送る。継母の場合は、娘の皮を剥いで裸にして売るのである。それだから本当の母は愛すべき点があるが、仮の母の場合は甚だ憎むべきものがある。

まして、仮の母が娘を買う場合、それが誰の子であるのかわからない。乞食の子か、そもそも王族の末裔か。これを買ってきて妻・妾にするのである。一体どういう見であろうか。「妾を買うのに、その姓が分からなければ、占って判断する。」と『礼記』にある。ああ、彼らは果たして占って買ってきたのであろうか。齋戒沐浴して、これを家廟で占うのが、礼である。二十四文をふところにして、走って柳原の嚴君平（漢代の中国の易者）に訊ねるのも、また占いである。私はかつてある占い師が、人のために、芸者を買うのを筮竹で占っているのを見たことがある。その占いでは「蒙（䷃）」から「蠱（䷑）」に行くこと出た。占い師が言うのは、「女を娶るにはよろしくない。金のある男に目が眩んで、身を持ち崩すことになる。いいことは何も無い。買ったままもなく男を見つけて逃げてしまっただろう。蒙は、暗くて明るくないことである。蠱は、敗れて成功しないことである。様子が明かでないのに女の欺きの言葉を信じて、失敗して以前とは違った事態になる。ましてこの女は、ただ利益だけしか目に入っていない。よく家を守って最後まで

で添い遂げられるはずがない。」ということである。私は、その横から口を挟んで言った、「この女は、その生まれの善し悪しはどうか。」と。その占い師は、「坎（䷜）は馬で、巽（䷸）は臭であり、艮（䷳）は毀折である。だからこの女はどこの臭い馬の骨だか分からない。」と言う。しばらく首をひねってから、「坎は真北の方角の卦であるから、これは小塚原の者であろう。」と言う。

私は、これを聞いて大いに笑った。家に帰ってから秘かに考えてみた。彼は、財を費やして、狂い走るようにしてこの馬の骨を買う。何に使おうとするのか分からない。そこで本草を読んでみると、「馬の骨は熱病の気を避ける。赤い布の袋に入れて腰に提げる。男は左に提げ、女は右に提げる。」とあった。始めて理解ができた、馬の骨にも使い道があるのだと。むかし郭隗は、燕の昭王に告げて言った、「昔の人君は、召使いの者に死んだ馬の骨を五百金で買わせた。」と。そうなら彼の人を買ってきた馬の骨は、百金の値段であるので、別に高いと言うわけではなからう、別に高いと言うわけではなからう。

※

酒樓や船宿で芸者を招く場合、直ちに芸者の家に命じて迎えるわけではない。芸者を命じる家は、二軒ある。一軒は岡崎屋（おかざきや）で、一軒は立花屋（たちばなや）である。ともに同朋街にある。これは吉原の遊廓では、見板（芸者の仲介業、見番）と言われるものである。吉原では、芸者を出している家では、芸者の名前を小さな板に書いてこれを掲げている、と聞いている。娼樓からの問い合わせがあれば、この板を見て芸者を出すのである。だからこれを見板というのである。柳橋の地は吉原のような花街とは別の取り決めがあるのである。そのかつての決まりによれば、大妓のことを酌人（しゃくじん）と称し、小妓は給仕（きゅ

うじ」と称した。しかし、この三・四年来この方、小妓の名が一般的になり、またあるいは（給仕でありながら）酌人と称したりして、給仕という名称はついに減んでしまった。しかし、「芸者」という呼び方については、決して名をかたり奪うことはできないのである。そこで立花と岡崎の二軒でも、また見板の名を使うことはできないのである。しかし、名は違っていても実質は同じものである。

この手の店の仕事として、傭奴（やといおとこ）を置いておくことがある。都では俗に、「人宿」（ひとやど）と呼んでいるものである。また「飛脚屋」と言う名称もある。思うに、男を置いておいて芸者のお供をさせるためであろう。岡崎と立花の二軒で、あわせて三十人ばかりいる。そのほかにもこの仕事をするものもいるが、ごくごく僅かである。酒楼の中で川長や柏屋では、自分の所に男を置いている。しかし、男を置くことを専らの仕事としているものは、（岡崎と立花の）二軒だけである。芸者や酒楼・船宿は、皆この二軒のことを、「箱屋」（はこや）と呼んでいる。またその男を「回箱」（はこまわし）という。また単に「箱」ともいう。吉原の「芸者」は、男に三味線を箱に入れて背負わせる。だから「箱屋」とか「回箱」の名があるのである。この地の芸者は、表向きには三味線箱を持ち歩くことはできない。みな風呂敷でもって三味線を包んで、着替えと一緒にこれを背負うのである。だから三味線は継棹式である。そこで「箱」の名称だけが徒に伝わっているのである。

大体この箱を持つ男が、芸者のお供をする場合、芸者は金一分を得て、その中から百五十銭を（この男に）与える。小妓は二朱を得て、百銭を（男に）与える。だから一人・二人の芸者に従うのを喜ばないで、多くの芸者に従うのを喜ぶ。酒楼や船宿で芸者を招く場合、どここの家は岡崎に命じ、どここの家は立花に命じるといふように、決まり所がある。

男についても好き嫌いがある。あの男は素直である、あの男はおしゃべりであるとか、品定めをしてから使うのである。芸者の場合でも同様である。鼯鼠と言うのはそれぞれに異なっている。

男が芸者のお供をするに当たって、（芸者が）三味線を弾こうとすれば、棹を継いで線を懸け、また着替えをすれば、着物に髪をして帯を畳んで片付ける。乳母と同じで、雨が降れば傘を取りに帰り、夜になれば走って行って提灯を用意する。ただ芸者の命じるままに、東に走り西に駆けるのである。もし芸者に馴染みの客がある場合は、男も必ずその客のことを知っている。このような男に対しては、客の方も可愛がつて幾らかの鼻薬（金）を与え、芸者の方もこの男を可愛がることは、他より人一倍である。そうしなければ、その内緒事を言い触らされ、悪口を抑えることはできない。鼯鼠の男がそれぞれ異なるのは、このことに因るのであるうか。

ああ、そもそも農業は国の大本である。職人や商人は身分は低いとは言っても、それぞれの仕事がある。牛や馬でも荷物を運ぶのを助け、重い物を背負って遠くへ行つて、人の役に立つ。犬も泥棒が来ると吠えるし、猫も鼠を捕まえる。それぞれに職分があるのである。それなのに、いつら男達は、一体何者であろうか。大の男で、むくつけき髭を生やしながら、卑しい女達の雑役に甘んじている。足袋を結んだり靴を直したりして、女の心に媚びて、わずか数百銭を手に入れる。その恥はどれほどのものであろうか。人であるのに、ほとんど犬猫に変わらない者である。私が思うに、あいつら男達は死んで地獄に行つて、牛の首や馬の頭をした地獄の獄卒のようなものにならうとしても、きっと難しいことであらうよ。何と哀れむべきことであらうか。

馴染みの客で芸者の家に直接行く者については、あいつら男達は儲けの仕様がな。それで皆これを憎み嫌うのである。しかし馴染みの客が

船に乗って、芸者を連れるような場合でも、また男を雇わない場合もあるということである。しかし、酒楼や船宿で芸者を招く場合、ある芸者を指名して命じると、男もその家に駆けつけることになる。特に指名しない場合でもこの男達は、勝手に芸者を呼んでくる。だからこの男達も全く権限がないと言うわけではない。私が小説本の類を読んでみたところ、かつての名を馳せた芸者達で、こういう男と特別の関係を持つ者が多かつたけれども、今日では見られない。ただ売れないで困って、男の力を借りて売りだそうと考える者もあって、男と私通すれば、他の芸者達は嘲って、茶人（変人）扱いにする。甘んじて茶人になるのは、茶をひく「客がつかない」のを愁えるがためである。

※

芸者が座敷がからなくて家にいるのを、「茶をひく」という。どういうわけかは分からない。考えるに恐らくは、暇をする事がなくて、（仕方なしに）白を抱えて茶をひくということであろうか。柳宗元の詩（「夏昼偶作」）に、「ちようど正午に昼寝から覚めれば、他の音は何も聞こえず、ただ里の子供が竹林の向こうで、茶臼をひいている（音だけが聞こえる）」というのがある。その状況は少し違うけれども、（風流の）趣は共通するところもあるようだ。売れている芸者は春・夏の繁盛する時期には、一月に五・六十の御座敷に出る。冬の三ヶ月であつても、茶をひくようなことは甚だ希である。

芸者の一席の値を、「玉」という。玉という言い方は、吉原に基づいている。吉原の芸者が、客の数を書いておく帳面を、「玉帳」（ぎよくちよう）という。これを聞き伝えてこの地でも同じように言っているに過ぎない。芸者達はいつも、今月は「玉」を幾つ得たかと言うことを尋ね合っている。私は三十とか、私は五十とか、競ってその数が多いことを誇つ

ている。みな「玉」を望んで「茶」を嫌っている。俗に人を侮辱するのを、「これを茶にする」（ふざける）と言っている。この言葉は、このことに基づいているのであろうか。

売れていない芸者は、春・夏の繁盛している時期でも「茶をひく」ことを心配している。まして、秋・冬の客足の寂しい時期は、食べていくことも出来ないようになってしまふ。それで秋風がひとたび吹けば、みな戸を閉めて姿をくらしどこかへ行つてしまふ。花が咲き柳がふくらむ時期になつて、また出てきて商売を始める。土地の人は、このような芸者を「羽織芸者」と呼んでいる。羽織という物は、暖かなれば脱いで、寒くなれば身につける。彼女らは、その反対である。それでこう言うのである。

この地の芸者は、春や夏には百名余りいるが、秋や冬はその半分がなくなつてしまふ。羽織芸者がいるからである。羽織芸者の他に、「カイツブリ芸者」というのがある。これは御披露目もしないで芸を売る者である。芸者達は、これを仲間の中には数えていない。「カイツブリ」は水鳥である。波間に出没しては魚を食っている。彼女らは本物の芸者の間に出没して利益を得ているので、こう呼んでいる。しかし、思うに芸者の御披露目には、振る舞い金を町内や大家などにも幾らか、さらに酒楼・船宿・箱屋にも贈り物をしなければならぬ。さらに着物の費用もかかる。計算してみると、三十金ばかりはなければ、御披露目をすることは出来ない。そのため「カイツブリ」になる者も多いのである。

芸者で名声が大いに鳴り響いている者は、一年の所得が、一百金を超える。富んでしかるべきだと思われる。しかし、誰もが窮乏している。それは何故であろうか。収入が多かつたとしても、支出もまた多いのである。収入が一分（四朱）あつたとしても、自分のものとなるのはそのうち三朱である。しかも、盆・暮れと一年五回の節句には、それぞれ支

出も多いのである。家での飲食も、普通の人に比べればはなはだ贅沢である。まして自分が着る衣装、あるいは簪などについてはなおさらである。履き物に金をかけ、手拭いに金をかけ、紅・白粉に金をかける。金をかけるのは、稼ぎよりも多いことになってしまふ。それで芸者の家、人から借金をしていない者は、めつたにない。

芸者が新しい着物に替えるのにも、決まった時期がある。正月の年始、三月の節句、四月一日、端午の節句、五月二十八日の両国の川開き、六月の祇園会、七夕、九月一日、重陽の節句、正月の夷講である。しかし、中等以下の芸者は、必ずこの時期にいちいち着替えることなどできない。この地での（一般の）風俗としては、端午の節句にひとえを着る。そして五月二十八日の夜は、例年花火を両国橋の南で見る。これを川開きという。この日に始めて、薄絹の縮みを着る。一般の家で、端午の節句にもう縮みさらしを着るのとは習慣が異なっている。芸者が新しい着物を誂える場合、衣一襲（かさね）、帯一条、內衣、長襦袢（ながじゅばん）なるもの一領、これは深い紅色が極上である。少し歳を取ったものは、これを白くしてもよい。中間色を使ったり、あるいは絵柄をあしらったものはかえって趣がないように感じる。小妓は別に腰帯を作る。みな着替えが一揃いあって、宴席の間に席をはずしてこれに着替えるのである。だから新しく衣装を作った場合、その値段はただ五円とか七円とかではおさまらない。古いものを質に入れて新しいものを買ったり、表をとって裏にしたとしても、その費用はまた相当なものである。

そこで、それぞれ馴染み客をこしらえて、着物を誂える苦勞を逃れていく。とにかく馴染み客は、芸者の様子を見ていて、その費用を助けないわけには行かなくなるのである。『板橋雑記』に、「着物はみな馴染み客が揃えてやる。巧みな模様とか最新の仕立ては、女将の見立てである。着物の長い短い、袖の大きい小さいなどは、その時時の流行で変わって

いく。これを時世粧（現代風装い）という。（『板橋雑記』が書かれた）崇禎年間（一六二八年より一六四四年）は、今から二百年も前であり、場所も数万里隔たっているのに、風情が甚だ似ているのは、奇遇と言ふべきであろう。

しかし、このごろの服装が美しくなったのは、月毎に増し、日毎に進んでいるかのようにあり、今年の春に至って、ことにその傾向が甚だしい。大妓の服装ははるかに奥様方の上に出ているし、小妓であってもまた大妓と同様ななりをして、頭の簪は鼈甲できららかに飾りたて、さらに大妓は、タイマイの長簪を挿すようになった。芸者で、簪を挿すのは、吉原だけの決まりであって、他の地の芸者は簪を挿すことはできない。しかし、華やかさと贅沢が極まって、してはならないことをしなければ、おさまらないまでになってしまつてきている。

しかも、（吉原の）他の地の芸者は、客席に侍って、ただ唄を歌い舞いを舞うだけである。吉原のように、これに鼓を加え、笛を加えたりするようなことは、許されていないのである。ところが今年の春から夏にかけて、ある芸者が太鼓を柳橋の北岸（きたがし）のある楼（いえ）で打って、船宿でもめ事があつた。吉原の人がそれを聞いて、吉原の業を侵すものであると責め、併せて服装が度を過ごして派手やかになったのを責めて、これを官に訴え出た。町名主達はこれを恐れて、芸者に服装を贅沢にしないようにさせ、帯に金色を入れることを禁止し、長簪はやめ、普通の簪の数も制限した。小妓には、ただ銀簪一本だけを挿すことを許した。さらに五つ（午後八時ごろ）以降は、客の招きに応じるのを禁じた。それは、売春を防ぐためであつた。

客で吉原に遊ぶ者は、まず柳橋にやってきて飲み、芸者を連れて吉原に行き、また柳橋に戻ってきて泊まる者が多かつた。吉原の人は、常に柳橋の芸者の売春が次第に盛んになって、自分の方が害を受けることを

憤慨して、太鼓や華美の服装を責めるときに、ついに決まりを作つて、芸者が船で吉原に行く場合、客を送るのはただ三谷溝（さんやほり）までで、郭（くるわ）内に入るのは許さないということにしたという。しかし、このごろでは吉原は日々に寂しくなり、柳橋は日々に繁盛している。憎しみの余り、このような計に出たのである。誠にもつともなことである。しかし、衣服の贅沢と、夜の客の招きとについては、禁止令が出て僅か二・三十日のうちに、また元に戻つてしまった。誠にもつともなことである。これはつまりは芸者達が官（かみ）を恐れず、自らほしのままにするがためではない。思うに、大江戸の繁華の勢いが、然らしめるからであつて、到底止められるようなたちのものではない。

※

世間に口にされている諺に、「女郎の赤心（まこと）と四角い卵とは、あるはずがない。もしあれば、晦日にもまた円い月が出るというもののだ。」というのがある。ああ、女郎や芸者だつてやつぱり人である。どうして赤心（まこと）がないということがあろうか。ただ淫らな音曲の中にひたつて、「嘘」とか「欲」に聴くなつてしまつたのである。習慣が、知恵と一緒に身についてしまつて、感化が、心と一緒にできあがつてしまつて、このような状態になつてしまつただけである。

しかし、歌妓（芸者）と女郎とは、自ずから区別がある。芸者の中には、気概を持つていてオベンチャラを喜ばず、おとなしくて淫乱な行いを好まないものが、時々いるものである。どうしてその實際を調べもしないで、「晦日の月」や「四角い卵」になぞらえることができよう。しかし、芸者で、淫乱な行いをして仕方のない者や、役者に入れあげて財産を使い尽くしたり、火消人足などシゴトシに喜んで身を任せて、ついに駆け落ちをして、一生を台無しにする者は、言うまでもなく多くい

る。世間の人は、ただこのような芸者がいるのだけを見て、行いがしとやかで才知が優れて、大いに焼き持ちを焼いて向こう気の強い女なんかより優っている者が、その中にいるのを知らないのは、なるほど当然のことであるうか。

三味線を面白く弾いたり唄を歌つたり、お酌をしてその場の楽しい雰囲気醸し出すのは、大妓でなければだめである。もし性質について云々し、かならず貞淑な者を求めようとすれば、小妓の中から選ぶべきである。小妓で気だてがよく、歳が十五歳ぐらいの者は、その悪習に染まっていたとしても、それほど深くもなく、客を騙すやり方を学んでいたとしても、まだ未熟であり、まだ処女を失っていない者もいるのである。気の多い客は、処女の芸者を水揚げすることが出来れば、花柳界の中で一番の楽しみである、と言うのである。その女を真情でもつて懐け、義でもつて励ませば、欲張るとか寝返るとかの了見を起こすことがないのは、受け合つてもよい。しかし大妓は寝返りやすい。むさぼるためである。小妓は寝返りにくい。むさぼらないからである。ある人は、「小妓は面白味が少なく、大妓は面白味が多い。」と言う。この言葉は、もつともである。しかし、ただ酒の席での面白さだけで評価したのなら、赤心のあるなしを云々する必要はないであろう。雰囲気盛り上がり、その場の楽しさを評価すれば充分である。しかし世間の人赤心を云々するのは、男女の深い関係に入つた場合のことである。このような場合、貞淑な者でなければよろしくない。貞淑な者は、小妓にこそ求めるべきである。大妓に求めてはならない。しかも、まして自分の手に落ちた小妓が、また三・四年のうちに大妓になれば、お酌の方も夜の床の方も、両方とも申し分がないではないか。

私は、これから風流の世界に遊ぶ若い人達が、相手の人柄を選ばないで入れあげ、財産を使い果たして、楽しみは僅かなのにわざわざ長く

続き、財産を亡くし、名前を落とすのを哀れんで、戯れにこのことを書いて、遊び好きの者に示すのである。これまた老婆心である。（『板橋雑記』の）金陵の名妓李十娘が余澹心に語った言葉に、「私は、世俗の塵の中の内やしい遊女であっても、淫乱を好む夏姫・河間婦（ともに中国歴史上の淫婦）とは違っています。もし私が心から好きな人ならば、賓客のように謹んで接しておりまして、心の底から思っているのです。心から好きな人でなければ、しいて枕を一緒にしても、心はその人から離れているのです。」とある。ああ、柳橋の芸者は多くいる。もし深く捜し求めたとしても、一人でも十娘のような心を持った者はいないということであろうか。

※

江戸開幕以来、江戸の名妓の中で、容姿が絶世であって、技芸を全て身につけていて、名前が小説に伝わっていたり、またその実績が芝居などに残っている者は、数限りなくいる。しかし、今はそうではない。みんな似たり寄ったりで、その間に一人の特別に抜き出た者はいない。しかし、いまなお名前を挙げるべき人は、ただ両国橋東の阿菊（おきく）である。彼女は、絶世の美人とか、絶世の芸があるとか言うわけではないが、かほそい女手でもって、すばらしく立派な酒楼を墨田川の西に営んでいて、「有明楼」と額を掲げている。「有明」の名は、瞬く間に都内に広がっている。意気盛んな遊び好きは、この楼で一酔を得ない者はいない。川口（かわぐち）・平岩（ひらいわ）の二樓が、ようやくこれに続く。しかし、「有明楼」は、女が主人である。その俠気・才覚はまた評価すべきところがある。頼みとする旦那がいて、このような取り仕切りをしているのではあるうけれども、しかし世間一般の誰にでも身を折る芸者が出来ることではない。そのほかには、女の身一人でこれに超

える者については、聞いたことがない。

柳橋が盛んで賑わっているのは、今がその頂点である。それなのにどうして才気が優れて、その名を江戸中に馳せている者がいないのであろうか。余曼翁の書いた『板橋雑記』には、金陵・珠市などの名妓を列記して、彼女らの小伝を作ったので、佳人の行状は、百世絶つても朽ち果てることがない。私は今柳橋の紅裙（芸者）について記録して、『板橋雑記』に倣おうとしている。しかし、誰一人、行状を記録すべき者について詳しく知らない。そこでただ耳にした名前のうちから、その七・八割がたを左に並べてみるだけである。後の私と同じように男女の情の方面について愚かな物好きな者が、もし詳しい事情を調べて、彼女達の伝記を作って、余曼翁の跡を継いだならば、一つは芸者の在りし日の麗しい姿を永く忘れないようにさせることが出来るし、一つはこの地の繁華の有り様を後の日も想像することが出来るであろう。次に列挙する者は、容色の善し悪しや、技芸の巧い下手に関わらず、聞いたままを記したままである。

阿一・阿三・阿金・阿栄・阿幸・阿弓・阿豊・阿兼・阿文・阿紺・阿花・阿竹・阿里・阿山・阿六・阿百・阿万・阿久・阿塩・阿梅・阿大・阿浜・阿紋・阿玉・阿蝶・阿琴・阿德・阿常・阿柳・阿綱・阿楨・阿相・阿絹・阿縫・阿鶴・阿筆・阿蓑・阿歌・阿芳・阿時・阿線・阿半・阿蓮・阿元・阿満・阿国・阿滝・阿浪・阿雪・阿色・小勝・小春・小繁・小鶴・小方・小蝶・小花・小照・小徳・小鉄・金八・久米八・米八・玉八・富八・竹二・菊二・駒吉・栄吉・常吉・長吉・米吉・三吉・甚吉・亀吉・倉吉・春吉・朝吉・斧吉・梅吉・美代・喜久・喜佐・佐濃・伊嘉・都和・延玉・伊呂波・豊美佐などは、大妓である。

阿中・阿清・阿赤・阿花・阿里・阿藤・阿奴・阿歌・阿亀・阿吹・阿房・阿豆・小糸・小芳・小玉・小金・小路・小稻・小松・小藤・小島・

政吉・久吉・三吉・千吉・種吉・里吉・駒吉・八重・勘八・権助・金太郎などは、小妓である。

思うに、芸者の優劣とか等級とかは、人によって見るところが異なっている。どうしてその品評を独断で行うことが出来ようか。将来彼女達の伝記を作つて、その事跡を顕彰する者がいれば、その評論は自然と定まるであらう。

【追記】

この編は、安政六（一八五九）年十一月に書き上げた。だからここに並べた者は安政五年から六年にかけての人である。しかし阿金・菊二・小照・梅吉など数名は、みな小妓であつたけれども、今年万延元（一八六〇）年になって大妓になった者である。また米八・延玉らは、また今年新しく名前を掲げた者である。これらはみな今年の新秋のことであり、追記して補つた次第である。しかし、金八・常吉などの者は、一昨年から去年にかけて身請けされた。阿豊・栄吉達は、また今年身請けされた。これらはそのまま記して削つてはいない。

※

ああ、私が柳橋の繁華の様子を記すに当たつて、歌妓との遊びの趣について記してきた。しかし、徒にその裏の事情を穿鑿し、醜いことを暴露することになった。何と殺風景なことであるよ。「古今を通じての無情の人」と言われるであろうよ。世の才子・佳人からこの評価を得るであろうことは、言わずとされている。しかし、私は決して本当の無情の人ではない。極めて多情の人なのである。多情であるのに無情の発言をするのは、思うところがあつてのことである、考えるところがあつてのことである。

そもそも多情のことについては、どうしてあの愚かに蠢いている虫け

らのような連中と語ることが出来ようか。風流の遊びというものは、またどうしてあのようなこせこせ・けちけちした奴らと一緒にいることが出来ようか。一緒にいい語ることが出来る者は、この世の第一等の達子（物事に通じた人）であり、古今を通じての第一流の才子だけである。達子とか才子とかは、どうしてそんなに多くいるはずがあるか。そこでこの無情の言を弄して、あの愚かでこせこせした者達に、女という者は、外面は菩薩のようであるが、内心は鬼のようであるという真理を悟らせ、一見すると極楽世界のように思われても、実はそこは無間（むげん）地獄に他ならないことを知らしめて、ひとたび心を入れ換えさせ芸者の所に入り浸つたり溺れる心根をすっかりと改めて、自分の身を全うして、自分の家を保つていくことを願うからである。

しかし、そうは言つてもこの広い世の中に、全く一人も達子・才子がないというはずはなからう。もしこの本を間違つてその人達が目にしたとしたならば、私のことをこせこせした奴らと同じ仲間であると思ふのであろうか。その時私はどんな言葉でもつて、これに應えたらよいものであるか。風流な男女の仲とか、花柳界の遊びの趣と言ふものは、愚かなように見えても愚かではなく、俗に近いようではあつても俗ではなく、その秘訣について、自得する以外はないのであろうか。香りを蘭や菊の花園に盗み、珠を宝石の眠る淵に盗むについては、周公や孔子がそのような教えを残したわけではないが、どうして目を怒らせ髭を張つて、ただただ遠ざけること、無礼で野卑な者に対するのと同様であつてよいものであろうか。

人臣であつても、謝安石が、談笑している間に、百万もの秦の強敵をくじき退けて、晋の国家を守つたようなことは、それだけで充分な働きである。どうして、かつて東山で遊妓と遊んでいたことの善し悪しを云々する必要があらうか。白居易が、博識で文才豊かで、名前は歴史書の中

に輝いていて、その詩は生前から（日本など）海外に伝わっていたといふことであるが、それだけで充分である。女性への思いが断ち切れなかったからといって、どうして白居易の価値が損なわれるということがあろうか。今の君子は、その議論ははなはだ細かく、その行動は甚だこせこせとしている、風流・情趣というものがどういふものであるかを知らないものである。しかし、気の強い妻や傲慢な妾の害毒は、艶やかに歌い美しく舞う芸者達よりはるかにひどいものであるといふことを知らないのである。それ故に妻と妾の中が悪く家が治まらないで、かえって放蕩野郎の冷笑的になる者が何と多いことであろうよ。

花柳界の遊びについて、その伝来については遙か彼方まで遡る。そこで名妓とか艶やかな話が残る女の事跡は、英雄や忠臣らと同様に、千年の後まで伝わっている者が、数限りなくいる。多情の人がいて、記録してこれを残したのであろうか。六朝の南齊の蘇小小は、西陵の松柏と同じく貞節の心を示したし、宋の毛惜惜は淮海の波乱とともに死をもつて節義を守ったし、晋の緑珠は石崇に対して、自らの命を絶つても恩に背かなかつたし、隋の紅払は李靖に対して、真に帰するところを知っていた。唐の楚蓮香が座り臥すと、蝶や蜂がその香りを慕って来たという。高玲瓏が詩を詠うと、その音は決まって清らかであった。明の顧媚の迷楼はきらびやかに巧くできていて、風流な客を迷わせたし、唐の薛涛の美しい詩箋は文人達の書齋に彩りを添えた。明の蘂芳は死をもつて操を立てたし、明（から清にかけて）の李湘真（李十娘）の風流さは、全く女性とも思われない。一方、我国では、かつての白拍子といわれる者は、また今の芸者のことである。千手（せんしゅ）は、琵琶を弾いて重衡を旅の宿で慰め、静御前は舞を舞って頼朝の幕府にも屈しなかつたことなどは、千年の昔の情愛のことであつて、百世の後に伝わる趣深い話は、聞く者をしてうっとりさせ我を忘れさせ、精神や靈魂が身体から飛び

出して舞い上がり、その美しさに涎をたらすほど感激させ、その情愛に涙誘われるほどである。世の人情が薄くなりけちけちとし、このように風雅な者は、今はもう見当たらない。しかし、人の本性は今も昔も変わらないはずで、人情が木石に変わったわけではない。今の才子・佳人も、昔の才子・佳人と変わりはない。風流な花柳界の遊びにおいては、昔を思い起こさせてくれるようなものはないのであろうか。

もし春風が氷を解かして、氣候が次第に穏やかになると、墨田川の東（向島あたり）の家の梅が、南側の枝も北側の枝ともに咲き出す。美女をどこからか漂う香りの中に連れて行き、美人を枝がまばらになつて映っている影の側で抱くのである。紅い着物の裾がひらひらとして「花の神」の魂を奪い取り、塗り下駄の音がカラン・コロンと鳴って、鶯の声と調和して響いている。酔いを柳島あたりで買って、墨田川の堤で興に耽る。まして、桃や李が紅くあるいは白く咲く爛漫の空に、桜の花が一塊の雲のように姿を浮かべるのである。墨田川の流れはいよいよ青く、その中に白魚が銀の鱗を閃かせている。金の樽に酒を入れて、夕べに酔い、木蘭の梶を竿さして、明け方に墨田川をさかのぼる。大妓五・六人ばかり、まだ幼い小妓六・七人ばかりを、あっちへこっちへと引き連れて、春の新しく作った着物の美しさを競い合う。さらに髪に花を挿したり草を摘んだりする楽しみがある。風に吹かれ唄を歌って帰るのを忘れてしまうほどである。孔子が認めてくれるかどうかは分からないけれども、孔子が「私は曾点の風流を評価しよう。」と言つたその曾点にも優る楽しみである。

そうこうしているうちに、月日は早く駆け抜け、春の三ヶ月の楽しみは、たちまち夢を見たような遠いこととなり、新緑の木木が庭に充ち、子規（ほととぎす）が雨に鳴いている。過ぎ去つた春の遊びのことを美しい窓辺で語り、つもる気持ちを静かな部屋の中で話す。外に出られない

いという艶やかなる憤悶の気持ちは何旬かの間続いていたが、その梅雨が今まさに明けた。あたかもこれが五月二十八日の墨田川の川開きの花火の夜であり、両国橋の辺りには、沢山の茶店、多くの酒屋が、新しい簾を一斉に風に靡かせ、色鮮やかな提灯が照らしあっている。船が東から西から、梶が打ち合い竿が擦れ合うように(ぎっしりと詰まっついて)、数里に及ぶ大河には、(船が多くて) 青い浪一つ見ることは出来ない。あるいは屋形舟を川の中ほどに浮かべて、漢の武帝の汾河での遊びになぞらえたり、あるいは船足の速い小舟でもって芸者のところを訪ねて、恍惚として白居易が潯陽江で老妓を訪ね同情したのと同じ思いをするのである。三味線や笛が曉まで鳴り、談笑が止むことがない。橋の下の水の上では、涼しい風が心地よく骨身にしみるようであって、三伏(真夏)の暑さも、何であるとも感じないほどである。身も清らかで心も爽やかで、(月に行ったという) 嫦娥と一緒に月の都に行くかのような心地である。漢の張騫が博望から仙人の筏で黄河を遡り天の川に行ったというが、墨田川での楽しみは存分なものであるので、何もわざわざ天の川に向かつて出発する必要もないのである。

七夕の牽牛と織女が会おうという夜、(天の川では鵲「かささぎ」が橋渡しするというが) 柳橋はまさにこの世の鵲の橋である。人間の世界では、織女は専ら三味線を弾くので、雲の薄絹を織る暇がない。そして人間界では牽牛は連れている牛を売って(女のところで) 飲む。楽しい酔い心地の夜を重ねるのである。夜を重ねる出会いは、天の世界の出会いが一年に一度なのとは、遙かに隔たっているようだ。まして仲秋の月の時は、空も澄み渡り心も晴れ渡っている。楼に上って興に耽る晋の庾公のごとき者もいるし、船を浮かべて歌を歌う晋の袁郎のごとき者もある。月はますます白く照り、風はますます清らかで、さらにそればかりか旨い酒と旨い肴、さらにまた艶やかな三味線と悲しい笛の音とがある。

さらに首尾の松(墨田川の堤にあつたという松の名)に、ともづなを繫いで酒を酌み交わし、百本杭の辺りへ、櫂を動かして行くのである。秋の光が次第に微かになり、霜の気が凄涼たる時に菊を墨東の百花園あたりを訪ね、楓を真崎(まつさき)の寮で見るのである。隠逸の花である菊も、この様な時に見れば富貴の花のように見えるし、(紅葉を見るために)車を止めるその車の中には木槿(むくげ)のような美しい顔をした女が座っている。

冬の三ヶ月間の寂しい時期には、俗人や田舎親父なんかは柳橋から足が遠のくので、思い存分の遊びをすることが出来るのである。田舎者の芸者や下手な女が芸を売ることもなく、(客と芸者とが) 誠の情を交わして、納得するのである。風が凍りつき霰が降り注ぐような寒い夜でも、美しい楼閣は春そのものである。男女の気持ちを通わせる夢想は暖かく、酒はいつも香ばしい匂いを漂わせている。(外では) 両国橋の上の月影が、人を凍えさせているとは、思いもよらない。私は、『板橋雑記』で、孫臨が葛嫩と契りを交わしたときの歓び、あるいは韓香が(愛する人のために) 全ての客を断った親しみというのは、まさにこの時期のこの時間の出来事であったのではあるまいかと疑う。空が明けると、雪が降って家の瓦は真っ白になっている。その時、酒を瓶(かめ)に入れて、こたつを船に備え付けて、墨田川の堤の雪を眺める遊びをするのである。ああ、興が尽きたからといって、引き返そうなんてことは決してなるまい。さらにそればかりではなく、一年がまさに暮れようとして、人々が忙しく走り回っているまさにその時、世間の喧噪から離れて年忘れの宴を開いて、新春の遊びの約束をする。ああ、これもまた心地のよいものである。

私は、千年の昔の才子・佳人の心を推し量って、昔の心に満足する遊びを思いやると、今の柳橋と天地の違いがあつたりすることが有り得る

のであろうか。そもそも風や花や雲や月を眺める季節の変遷、琴や笛や唄の妙趣について、悲しんだり喜んだり、顔をしかめたり笑ったりの人情の絡まりは、詩にこそ作るべきであり、絵にこそ残すべきである。しかし、どうしてあの愚かでこそせせして徒に財産を費やして、豪遊ぶりを見せびらかして、その趣を構わず、ただ見かけの美にのみ涎を流すような輩と、この境地について語り合うことが出来ようか。

ああ、後世の才子・佳人たちは、私を無情の人と見なすのであろうか。それともあるいは多情の人と見なすのであろうか。そこで戯れのこの文をしたためて、評価を問うのである。そもそも山や川や風や月などの風物と、美女とか三味線や唄の遊びは、遊ばば遊ぶほど趣が出てくるものである。このことをここで語り尽くすことが出来ようか。ましてや、色っぽい駆け引きや秘訣の類は、その本人たちの心の内にもあるものではないのか。それは本当は筆と墨によつては表現できるようなものではないのである。ああ。

柳橋新誌 終

附 録

(劉仙客(柳河春三(成島柳北の友人)の別号)が著した『算法珍書』の第二帙所載)『算法珍書』は一帙のみで二帙は存在せず、戯文か。前田・日野注に依る。

何有仙史(柳北の別号)が、かつて『柳橋新誌』を著した。全篇六千七百二十字〔実際は一万千七百字ほど〕である。一字一字が金や玉のよきに素晴らしい。仙史がこの編を著すに当たって、柳橋で費やした金は二千金を下るまい。もし、ある人が、二千金でこの編を買おうとすれば、

一体、一字当たりの値段は幾らになるであろうか。これを算出する方法は左の通りである。

一金とは一両である。一両は銀六十匁である。全部で六千七百二十字。二千金は銀百二十貫匁(二万二千匁)。これを一字当たりに直す。そうすれば答が得られる。問の答はつぎの通りである。

【答】 一字の値は、銀十七匁八分六厘二毛余り。

〔訳注〕 この計算によれば実際は、銀十七匁八分五厘七毛余りになる。

〔訳注補〕

本文において原文で「妓」とあるのは、芸者と訳した。なお訳文十六頁上段三行目に「芸者」とあるのは原文のままである。当時において妓と芸者とは区別があったが、今日芸者という言葉がやや広い意味で一般に使われているようであるので、妓に相当する言葉には芸者の語を用いた。

『柳橋新誌初編』 訳

Translation of “Ryukyo-Shinshi Part 1”

佐 藤 明

Akira Sato